國學院大學学術情報リポジトリ

嘉永・安政年間の宮負定雄：幽界への関心に着目して

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小田, 真裕
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001699

嘉永・安政年間の宮負定雄
―幽界への関心に着目して―

小田真裕

はじめに

平田国学の地域における展開については、気吹舎（いぶきのや）への新規入門者を多く輩出する地域が、天保初年までは下総、開港期までは陸奥・出羽・三河、開港以降は信濃・美濃と推移することが知られている。[1] こうした受容形態の差異を地方門人の思想から検討した岸野俊彦氏は、平田門の主要な思想的潮流に天保期から嘉永期には神霊界への関心があったが、ペリー来航以後、その関心が海防や攘夷などに移行すると指摘した。[2] 近年、気吹舎における神霊界・幽界への関心を示す新史料の分析が進んでいるが、岸野氏の見解は概ね踏襲され、嘉永末年から安政初年は「平田派にとってひとつの時代の転換期」と位置づけられている。[3]

筆者も、気吹舎全体で考えた場合における当該期の画期性は否定しない。しかし、個々の気吹舎門人に即して考え

た場合、先行研究では彼らが幽界に関心を抱いた背景や具体的な関心の所在が十分に検討されていない。また、分析の対象も一部の門人に限られており、著述の少ない門人や門人以外の人々の思想を組み込んだ分析は数少ない。本稿では、下総国香取郡松沢村の気吹舎門人・宮負佐平定雄（みやおい　さだお）（寛政九〈一七九七〉～安政五〈一八五八〉）を主たる分析対象として、これらの課題を追究する。

宮負定雄は、先行研究において名主退役以前に注目が集まり、撫育教導による村落の自力更生を目的とした「天保期国学者」と位置づけられてきた。[4] そこで筆者は、天保八（一八三七）年の二度目の名主退役・江戸移住以後に注目し、気吹舎のある江戸根岸で薪炭を売っていたこと、天保十四年頃に江戸から松沢村に拠点を戻したことを明らかにした。[5] この帰村の動機は、「もとより田舎の農人」であるという自己認識に基づき、農業に出精して「米穀倍取の術」を見出し、それを世上の農民たちに広く教えようというものであった。そして、「世に隠なき農師」となることで、「金を貸して利足（ママ）を取」ったり「田地をかして作徳をと」ったりせずに、家を富み栄えさせることを理想としていたのである。[6]

平田派にとっての「転換点」とされる嘉永・安政年間に、定雄は幽界への関心を強める一方で、この「農師」意識に基づいて農業に関する試行錯誤を繰り返している。本稿では、気吹舎や地域の人々の動向にも目配りし、当該期における宮負定雄の思想の総体を把握することを目指す。

一、気吹舎と『神界物語』

嘉永・安政年間の気吹舎において、幽界に関する話題を惹起した書物が『神界物語（島田幸安幽界物語）』である。

同書は、清浄利仙君という神仙の弟子だという和歌山の医業生・島田幸安からの聞き取りを、紀州藩士の気吹舎門人・三沢明がまとめた書物である。(7)

三沢明は、天保十一（一八四〇）年八月朔日に三十一歳で気吹舎に入門しており、『神界物語』第一巻が成立する嘉永五（一八五二）年八月十一日以前にも気吹舎に自著を送っている。(8)「気吹舎日記」から確認できる、初めて『神界物語』が気吹舎に届いた時期は、第一巻のみが成立している嘉永五年十月九日である。また、第二巻までが成立している嘉永六年二月十四日には、気吹舎に三沢明からの紙包と「御神方之御薬等」が届いている。この「御薬」とは、如何なる病も治すという幽界の薬で、遠方の場合は、病人の年齢と姓名の書付および薬の代金を送付すれば、薬が紀州から送られるとされていた。

平田鋭胤（かねたね）は、当初『神界物語』に関心を寄せていたが、後に同書を「悉く焼捨、一切相弘メ申間敷筈ニ兼々申遣ハシ」たと述べている。(9)鋭胤は、奥州相馬の気吹舎門人・高玉安兄宛の嘉永六年七月二七日付書簡において、島田幸安を「誠ニ奇之ぬし」と評し、『神界物語』については「猶二篇三篇も追々差上可申候」と述べ、「有志之衆々へハ追々御写し被成候而も不苦候」と、「有志之衆々」という限定付きではあるが書写も認めている。(10)これは、『神界物語』第一巻の冒頭に、三沢明が島田幸安に対して「下拙済世之儀ニ付、幽境之事共承り候得共、秘密之儀は猥ニ他言致間敷段、偽無御座候」と伝えた旨が記されているように、『神界物語』自体の性格と合致した限定といえる。鋭胤は、この書簡で「紀州一條ニ付而ハ、兼而寅吉一件之仙境異聞掛御目申度候」と、『仙境異聞』のような関連書物の読書も勧めているが、「気吹舎日記」の翌嘉永七（安政元、一八五四）年四月五日条では、三沢明からの書状を「ツマラヌ書状也」と評し、清浄利仙君への入門を希望していた高玉安兄にも、同月付と推定される書簡で「昨年来アメリカ一件ニ付而ハ御諭しの趣相違いたし、夫故此節色々疑問ニ及居候」と伝え、利仙君への入門の誓詞を自身のもとに留め置いている。鋭胤の三沢

明に対する評価が、この間に変化しているのである。

『神界物語』には、各地から寄せられた利仙君に対する伺書の内容が収録されており、嘉永六年のペリー来航以降、鍼胤が翌年のペリー再来航やその後の対処について尋ねていることがわかる。高玉安兄宛の書簡で「御諭しの趣相違いたし」と述べている内容は、嘉永六年九月頃の「異国船一戦ニ及候与申ハ、来三月頃参リ候ヤ」との質問に対する、利仙君の「亜墨利加人願の通ニハ、迚モ公儀ゟ御免(開港・交易に関する―筆者註、以下同様)ハ在間敷候間、来三月闘戦ニ来ル方ニ相見へ候」という回答が外れたことを指している。[11] 利仙君の予見が外れた後、鍼胤は三沢明に対する疑念を強め、嘉永七年六月二七日には三沢明へ「咎之御状又々差出」し、高玉安兄にも九月に「紀州幽界の一件間違之事有之、段々疑問ニ及候所、いまだ明白ニ不相成内、島田幸安入幽(幽界に入ること)いたし、其後ハ別して不分明ニ御座候」との理由から、誓詞を返却している。安政二年以降も気吹舎と三沢明の間で書状が交わされているように、両者の交流は完全に途絶えた訳ではない。[12] しかし、『神界物語』のうち安政二年以降に成立した第二十巻は現存を宮負定雄の生家以外には確認できないように、鍼胤の態度が変化した安政年間には、三沢明の著述との接点は極めて限られていた。この点を踏まえ、次に宮負定雄の幽界への関心について検討する。

二、弘化・嘉永年間の宮負定雄

(一)神仙への質問

先行研究では、紀州で三沢明と面会する以前に宮負定雄が幽界に対して抱いていた意識が、ほとんど検討されてい

ない。そこで本章では、弘化年間から嘉永七（安政元、一八五四）年十一月四日の紀州出立に至る過程を取り上げる。

まず、当時の松沢村について概観する。[13] 松沢村は、文政十（一八二七）年時の石高が、旗本山角氏領二四六・一八三七石および熊野社領三石で、幕末まで領主の交替は無い。村人の生業は、同じく文政十年の史料によると、社家二軒と農間商渡世を行う六軒以外の二八軒が農業一統渡世である。各家の持高を分析した川名登氏は、近世後期から幕末期にかけて土地所有の零細化がみられ、貧農層が増加していると指摘した。[14] その要因の一つが天保四（一八三三）年からの天保飢饉で、松沢村では天保五年以降名主の交替頻度が早まり、弘化年間以降も地頭所勝手賄金の弁済が困難な状況が続く。宮負家の経営も、弘化四（一八四七）年以降は毎年僅かではあるが赤字を計上している。[15] 宮負定雄が江戸から帰村し、松沢村を拠点に活動する弘化年間から安政年間は、松沢村に天保飢饉の影響が残存しており、村内最高の石高を所持していた宮負家の経営も不安定な状況にあったといえよう。

続いて、宮負定雄の行動を検討する。小野将氏は、松沢村に戻った後の定雄の行動を、①諸国の奇談・説話類収集と、それらの自著への集成、②篤胤の「玄学」摂取と、「神仙霊薬」等と命名した薬の調合・販売、岩長姫神信仰に基づく薬草「富草（さきくさ）」（明日葉のこと）の効能の宣伝、③三沢明との交流により助長される、幽冥観への傾倒、④『農業要集』『民家要術』の再構成にみられるような、自説を集大成する著述の執筆、の四つにまとめた。[16] この整理を踏まえ、定雄が『神界物語』と接した時期について考える。

『神界物語』が成立する以前の嘉永四年、宮負定雄は岩長姫神鎮座の地とされる伊豆雲見山に二度目の参詣を果たし、当地で得た富草の苗を持ち帰っている。[17] また、『仙境異聞』で取り上げられた天狗小僧・寅吉は石井加津間と名を変え、嘉永七年には下総国香取郡阿玉川村に居住していたが、定雄はこの加津間とも交流があった。[18] しかし、安政二年五月成稿の『幽界通話（幽現通話）　下巻』には、安政元年に紀州で三沢明と面会した際に初めて『神界物語』を読み、「感

表1　神仙に対する宮負定雄の質問

	一つ書きの内容	備　　考
イ	先年から高根大神御神像御掛物を1軸預かり、当寅年(嘉永7、1854)年まで19年秘蔵していたが、7月頃に「筥入の儘相見へ不申様に相成」った。占者の考によると、高山の頂にあるという。「幽冥御神仙の御引上」でもあれば安心の至りであるが、どうであろうか。	一つ書きには7月とあるが、「神界物語　後序」ではこの出来事が閏7月とされている。「控日記」と「後序」という性格の違いなどを勘案し、本稿では閏7月として論を進める。
ロ	「人民助の為」に、「御神薬の御霊方」を一方で良いので伝授してほしい。	
ハ	先年、雲見大神参詣の際にあした葉(富草のこと)という薬草の種子を授かったが、その効能を詳しく知らない。どのような病気の妙薬になるのか、「人助の為」に教えてほしい。	嘉永5年付書簡(註22)では、富草に関連する『伊豆海島風土記』『本草綱目』『倭本草』『和名抄』の記述を紹介しつつも、「医書にも見えざるよしニ而御医師方も御存知無之様」であると述べ、効能についての考えを平山家の両名に尋ねている。
ニ	近年、筑紫辺や越後国村松辺で「農業種芸に付、稲の稔り倍取の妙術を考付候人」がおり、「国中甚豊饒」となったが、その妙術を秘して世間には広めなかった。自分も年来勘考してきたが、未だ考えつかず歎いている。「国益の為」、このような妙術があれば教えてほしい。	嘉永5年付書簡では、「九州辺」と「越後国村松辺」の「米穀倍取之工夫を考出し候人」と表記されている。
ホ	近年「農事窮理考」という書物を著しており、粗々草稿も出来た。「種芸の窮理に付、草木発生、花実の成形を思慮」していたところ、「天地開闢の道理も、草木開花の成形と同理」ではないかと考えついた。この理を明らかにすれば、種芸の事なので「聊国益の一端」にもなるかと思うので、天地開闢月星の成形を図画し、神覧に供して、この理の当否を伺いたい。	嘉永5年付書簡では、「農事窮理考」という草稿本2冊程が粗々出来たが、「大下書」なのでまだ見せないこと、追々書き継ぐつもりであることを述べている。
へ	近年、外国の夷人どもが猥りに渡来し交易を乞い、「上下の患」が少なくない。かの夷敵の火術・鉄炮・大筒などを防禦する御神法もあるかと思うので、教えてほしい。愚慮では、久延毘古神の御守を身に帯びていれば、夷敵の鉄炮は当たらないと考えるが、どうであろうか。	
ト	先年、石山玄司から「和方の医術」を伝授された際に授かった「秘術の書物」が「人民の助」になるか否かを伺いたい。	
チ	先年、佐々木鳳山から伝授された「火難除龍の一筆書」が「火難除」になるか否かを伺いたい。	

宮負克己家文書「道中控日記」(『宮負定雄未刻資料集』所収)より作成。
※イ～チは、一つ書きの順番に筆者が付したもの。
※「神界物語　後序」、嘉永5年付書簡はともに『旭市史』第2巻所収。

心」したと記している。[19] また、安政二年三月二七日付の書簡には、当時成立していた全巻分にあたる「神界物語十九巻」を「神仙江伺ひ候問條之御答委く筆記いたし候書物」と表現し、第一・二巻を「若山逗留之節抜書」し、第三巻については「正月中旬後ニ若山表より飛脚便りニ相届、小子所持仕候」と記している。[20] なお、嘉永七年八月成立の『神界物語』第十九巻に収録された、「敬仙の人々」として島田幸安が示した「人数都合弐百五拾人計」には、「総州人数人」が含まれている。このなかに定雄が含まれている可能性もあるが、いずれにしても弘化・嘉永年間の定雄については、岩長姫神信仰や石井加津間との交際によって神仙界・幽界への関心を抱いており、そのなかで嘉永七年に気吹舎を通じて『神界物語』の話題と接したとまとめられよう。

それでは、定雄は『神界物語』が惹起した

話題をどう受け止めたのだろうか。先行研究で十分な検討が加えられていない、この疑問に迫ることができる史料が、宮負克己家文書「道中控日記」である。この日記には、紀州で島田幸安に渡そうとしていた「幽冥の御神薬」の頒布を願う願書と、神薬を与えたい人々の「年齢姓名書」の下書きが収録されている。この史料を翻刻した『宮負定雄未刻資料集』の解題では、旅の真の目的が、三沢明と対面し、彼を通じて島田幸安から神仙の医法を学び、同郷の人々を救うことだったと指摘されている。しかし、表1に示したように、願書には他にも一つ書きで「幽冥の神仙」への質問が記されている。以下、質問を順番に検討していく。

イ）高根大神とは、寅吉が幽界で仕えていた杉山山人のことである。定雄は天保七年に江戸日本橋辺にある四日市の書肆で、気吹舎門人・多田屋某が売却した神影を見つけ、これを手に入れて守神としていたが、嘉永七年閏七月頃なくなった。「神仙の仰言」によって平田家が掛軸を和歌山に送ったのも同月だったので、定雄は家から掛物がなくなったことも「神仙の御取上」によるのだろうかと思い、この質問をしたのである。

ロ）平田鋭胤も言及していた「御神方之御薬」の処方を問うものである。紀州への「年齢姓名書」持参は、遠隔地の場合は病人の年齢・姓名の書付と薬代を届ければ良いという、気吹舎に伝わっていた情報と合致する。ただし、薬方の伝授も望んでいる点に定雄の独自性が看取できる。

ハ）定雄は、雲見山参詣から持ち帰った富草の苗を植え、近隣の村々で疱瘡が流行した際に富草を配り、一枚刷りの効能書も版行していた。また、「遠近の国々にも其種子を配分りて」いた定雄は紀州にも富草の種子を持参しており、富草の種子を受け取った三沢明はそれを紀州で栽培している。[21]

ロ・ハは、先述した小野氏の整理②と関連する内容である。注目すべきは、「人民助の為」あるいは「人助の為」といった理由から、薬方や富草の効能を尋ねている点である。「年齢姓名書」に「親族朋友其外病苦の者、盲聾瘖瘂の患に

沈居候者共」を記したと述べていることから、対象としている「人民」の範囲が気吹舎門人や縁戚関係の枠に留まっていないことがわかる。定雄は知的好奇心だけからではなく、こうした人々を視野に入れて質問を寄せたのである。

ニ）松沢村に帰村した動機である「農師」意識が読み取れる『野夫拾彙物語』（弘化三年成立）では、「文政の頃」に「九州方のさる大名の領分」で「米穀倍取の術を考ひえたる人」と、「越後の国村松といふ所」の「其類の術を知たる人」の例があがっている。また、後述する嘉永五年十月十二日付の書簡では、九州辺と越後国村松辺の「米穀倍取之工夫を考出し候人」のような「稲を作る妙術」の「考無之ニ付、残念ニ存、多年窮理学を志し心魂を凝し考」えたところ、「昨年（嘉永四）頃より米穀倍取之窮理之妙術も粗成就」したこと、「此術国中ニ普く被行候ハ、莫太の国益」となり、「民家豊足ニ相成り、仁義礼譲も随而起」こるだろうと述べている。[22] この「国益」と「仁義礼譲」を結びつける考え方は、文政九年刊行の『農業要集』から確認できる。[23] 松沢村に戻った後の定雄は、「農師」意識に基づき諸国から稲種子などを集めて生育を確かめ、「其書の説の非説の多かるを後悔して」絶版にした『農業要集』を「訂正増補」した『農事窮理考』を著す。安政二年に成立した『農事窮理考』「農政」の項に、『農業要集』と同じく「礼儀ハ豊足に起り、盗賊は貧賤に出といへり…」という文言が記されているように、『農事窮理考』執筆は、名主退役前と同じく百姓の「仁義礼譲」に対する課題意識に立脚していたのである。

ホ）『農事窮理考』は、文政十一年刊行の『草木撰種録』で提唱していた草木雌雄説を継承しているが、さらに『農事窮理考』には、稲の生り方が天地月星の生り方と同様であるとの考えから、「天地開闢生植一理考といふ図を書て、農家の童蒙に示す」として、その図が収録されている。[24]

ニ・ホは、小野氏の整理④と関連する内容である。表1に示したように、宮負定雄はこれらの内容を嘉永五年時点で、近隣に位置する鏑木村の豪農である平山忠兵衛・正蔵に伝えている。ただし、そこでは「米穀倍取之窮理之妙術」と

国益・仁義礼譲の関係に言及した直後に、「世上之人情者、我慢まけをしミの人物のミ多く、此方共之教諭ニ随候人者、稀々ニ見請候ニ付、先者弘め不申秘事ニ致し置候」と述べ、「此ほどは秘事之積りニいたし置」、「懇意之人」である平山家の両名にのみ料簡を尋ねると記している。嘉永五年時点の宮負定雄は、「農師」意識に基づく活動を行いつつも、世上との距離感を感じていたのである。

へ）先述したように、嘉永六年末から嘉永七年初頭にかけて平田銕胤は、二度目のペリー来航やその後の展開に関する予見を利仙君に尋ねている。[25] 嘉永六・七年のペリー来航による対外的危機意識の高まりと、当時の気吹舎における話題を受けた質問である。

なお、ト・チは、島田幸安宛願書下書の日付・宛名より後に記されており、トには会津の門人・石山玄司、チには庄内の門人・佐々木鳳山という気吹舎門人の名前が見える。また、定雄は嘉永五年に秋田の門人・竹村常吉から当地の稲種子を取り寄せている。[26] 従来ほとんど注目されてこなかった、東北地方の気吹舎門人との交際が確認できる。

（二）地域での反応

宮負定雄を取り巻く人々は、『神界物語』の話題をどう受け止めたのだろうか。

「道中控日記」に収録された病苦人の「年齢姓名書」の内容をまとめたものが表2である。このなかには、須賀山村・五十嵐対馬介光通、小見川町・山本伝兵衛保信といった気吹舎門人や、諸徳寺村の気吹舎門人・金杉龍蔵常長から頼まれた旨が記されている人物が確認できる。五十嵐光通は、文政三（一八二〇）年に気吹舎で寅吉と会って様々な質問をしていることが、『仙境異聞』からわかる。[27] 金杉常長は、「仙伝医方御直伝」の人物として島田幸安・三沢明・平田

表2　「年齢姓名書」に名を連ねた人々

国　名	郡　名	近世の町村名	旧市町村名	男人数	女人数
下総国	香取郡	松沢村	干潟町	2	1
		万歳村		1	
		関戸村			1
		鏑木村		1	
		須賀山村	東庄町	3	
		小貝野村			2
		今泉村		4	1
		小座村		1	1
		大友村		1	
		石出村		2	1
		飯笹村	多古町	1	2
		小見川町	小見川町	7	10
		佐原村	佐原市		1
		諸徳寺村		1	1
		桐谷村	山田町		1
		諸持村	銚子市		5
		塚本村			2
		宮原村			3
	海上郡	今宮村			1
		小松村	神崎町	1	
		三川村	飯岡町	2	
		(東・西)足洗村	旭市	1	
	匝瑳郡	新町村			1
		八日市場(村)	八日市場市	4	3
相模国	大住郡	八幡村	平塚市	1	

宮負克己家文書「道中控日記」より作成。
※小松村は、実際は香取郡に属するが史料上の記載を反映した。
※八日市場　庄七には、「外口村龍蔵(諸徳寺村金杉龍蔵のこと)より頼」と記されている。

鋏胤・宮負定雄・奥州伊達の気吹舎門人奥山正胤とともに名を連ねている人物である。[28] 彼ら自身が幽界への関心を抱いていたからこそ、定雄の伝える神薬の情報に好意的な反応を示したと理解できよう。ただし、「年齢姓名書」には下総北東部の広い地域から女性・子供も含む人々の名前が記されているように、気吹舎門人以外が多く名を連ねている。その範囲は下総だけでなく、相模にある松沢村の領主・山角氏の知行地にも及んでおり、「金弐朱入」などと実際に供出した金額が併記されている者もいる。

その一方で、神薬の存在を疑問視する者もいた。宮負定雄と縁戚関係にある、万力村の百姓・金杉佐右衛門貞俊は、嘉永七(一八五四)年十月に定雄から神薬に関する話を聞き、その感想を記している。[29]

【史料一】

嘉永七寅十月聞し事爰に記す、近頃紀州若山の藩中、医師島田某の六男、今の名は島田幸安(カウアン)と申人、前七八歳の

頃神かくしになりて神仙に仕われ、十八歳の時に紀州和哥山へ帰り来り、其節より今に以て神仙界へ自由自在に往来いたし、神の御用を勤るといへり、且難病の者ありて、右の幸安に願ひ薬を求て服用せしが、速に全快せしと也、依て何レの人々も病ひ有者ハ右人に願ひ、薬を頂戴いたしたる者何病も不治者なし、病の症をいわずとも只一ぷく被下候よし、其壱服ニて不治ものなしといふ、依之遠方の人の中にハ其病者の名ト年ばかり書付て薬を願ふといへり、其一ぷくの薬代銭にて五拾弐文ツヽ、何レ納るといへり、或人癩病を煩ふ、其者とても一ぷくにて治したりと、此五拾弐文の薬料を定る事不心得、病症異なるべし、症々により其病に応する薬も又異なるべし、薬にも高下有り、高下平均（ヘイキン）して定むるもの哉、和薬産物にて只手もとに出来る方剤なる歟、仙界の事ハはかり知る処にあらず

この記事は、『野夫拾彙物語　六』という史料に収録されている。『野夫拾彙物語』は、宮負定雄が弘化三（一八四六）年に成立させた全六巻の奇談や説話を集めた書物で、同書には安政年間まで推敲が加えられている。注目すべきことに、金杉貞俊は嘉永二年二月上旬に同書の抜書を作成した後、安政三（一八五六）年十二月に書き始める第七巻まで、自身が読書や見聞によって集めた内容を『野夫拾彙物語』という書名を冠した著述にまとめている。引用部分は、嘉永七年十月に書き始めた第六巻の冒頭に置かれた「紀州和哥山ニ而神仙ニ使し人の事」の一部である。貞俊は、『再生聞記　評論条々下』という平田篤胤『勝五郎再生記聞』の内容などを収録した写本にも神薬に関する話を加筆しており、[30]『野夫拾彙物語　六』と内容や表現が酷似していることから、これも嘉永七年十月頃の加筆と考えられる。『再生聞記　評論条々下』への加筆にも、癩病人が神薬によって快復し「常人の如く成」ったという『野夫拾彙物語　六』と同じ事例が取り上げられ、次のような感想が述べられている。

【史料二】

然共、癩ハ天命也、然処全快成しハ又不思儀とも云ツべし、是ハとも角も、外々の病人に遠方の人は年と名と書付て薬を願ふ者、何レも治せざる者なく、斯なるハ右の人仙堺江往来なる身なれバ、神仙へ願ひ病症さとりて其薬を神仙よりも受得るものか、如此ならバ追々国中聞へて今に評判も有べき事也、嘉永七寅十月松沢佐平（宮負定雄）ゟ伝聞処、かやうの説には山師と云事も有り、此事実説ならバ誠に貴き事也難有事也

二つの史料から、金杉貞俊が神薬に関する情報の真偽を保留していることがわかる。貞俊には、天保七（一八三六）から天保十二年頃にかけて著した『田舎荒さかし　医雑談　上』という当時の在村医について論じた著述がある。そこでは、「予は元より民家にして医を学ひたる者にハあらず」と自己規定しつつも、「常に農間有れば医に近付、遠路をいとハす奔走して諸医の物語を聞」いたと述べている。この言葉通り、貞俊は下総を訪れた元島原藩医や水戸藩領の医師などから直接医術を学んでおり、実際に薬の調合を行い、瘡毒治療のための水銀製造法などの医療・薬方に関する著述をまとめている。こうした行動の背景には、自身の親や妻が医者の力も及ばず、「病の為に身をはたし」た経験が影響している。貞俊は、『医雑談』のなかで、「闇雲散」という架空の薬を例えに出して次のように述べている。

【史料三】

今の世に病者あれバ医を頼ミ、或ハなまぐさ坊主を祈念に頼む事も、苦しむ病人を見て居るもならず、無是非無益の薬剤を服用し、却て病者に苦しみをます事あり、医の貴き所ハ病の見立の正敷こそ御医者様成べきに、見立て定めざるに闇雲散斗り盛かけ、病症不相応にして治せずとも、医案を是（ぜ）として病ひを強きものとす、爰を以て、薬にて活命の功ハなくとも自然に全快に成者を、医の骨折にて治したる如くに手柄ばなしをふけらかす、また薬

不相応成ものをたてつけて服薬させ、病に苦しむ上に闇雲散にてとゝめをさすといへとも、元より死証といふものハ、者婆が療治にも不及抔と申て、己れがつたなき所に心つかず、民家の大俗をまぎらかし、臭きものに蓋をした様ニ罪をおしかくすといへとも、何ぞ天道其科をしらざらんや

貞俊が、病気の見立てと薬の処方を重要視していることがわかる。自身で医療・薬方に関する知識を持ち、当時の在村医に対する批判意識を抱いていた貞俊は、どのような病にも効果を示すという神薬の存在を懐疑的にとらえたのである。ただし、「仙堺の事ハはかり知る処にあらず」、「実説ならバ」とあるように、貞俊は神薬の存在を完全に否定している訳ではない。

『野夫拾彙物語　六』には十八の話が収録されているが、「紀州和哥山ニ而神仙ニ使し人の事」の後には、「備後国藩中平太良が事」「江戸広小路寅吉神仙に仕ハれし事」「江戸南鐺町又兵衛悴多四郎魔物ニさそはれし事」「右備後平太良江妖魔山本五郎左衛門物語の事」と五話目まで、気吹舎で話題となった幽界に関する内容が続いている。安政五年までの蔵書の内訳を示した金杉家の書物目録では、平田篤胤の著述は「神祇古道」という項目にまとめられており、『仏道大意』『古道大意』『天満宮御伝記』『再生記』が確認できる。この「再生記」には、【史料二】の加筆がある写本および『再生聞記評論条々』が該当すると考えられる。前者の奥書には、「文政十丁亥年七月　都祭胤文為写之」という『勝五郎再生記聞』の写本を、天保四年に貞俊が書写したことが記されている。都祭胤文は、香取郡新里村妙剣宮の神主・胤伸の子で、天保二年に宮負定雄の紹介で気吹舎に入門している。『勝五郎再生記聞』は、『野夫拾彙物語　六』に収録された幽界の話題に触れており、貞俊がこうした気吹舎に由来する話題に天保年間から接していたことが確認できる。定雄が島田幸安や神薬の話を伝えた際に、これらの内容に言及した可能性も考えられるが、貞俊が定雄から『神

界物語』に由来する話を聞き、他の幽界に関する話を意識したこと、そこで意識した幽界に関する話と天保年間には接していたことが指摘できる。

嘉永七年の紀州出立前に、宮負定雄は気吹舎を通じて得た『神界物語』の情報を、地域で気吹舎門人以外の人々にも伝えていた。その際の反応は一様ではなかったが、気吹舎門人以外の人々には、幽界のことを意識する機会となったのである。

三、安政年間の宮負定雄

(一)「農師」意識と幽冥観

宮負定雄が紀州に出立した嘉永七(安政元、一八五四)年十一月四日、安政東海地震が発生した。「道中控日記」には旅路で見聞した被害の様子が書き留められており、それらの記録は後に『地震道中記』『地震用心考』などにまとめられる。紀州では、十月下旬に幽界へ入ったという島田幸安には会えなかったが、三沢明と面会し、『神界物語』第一・二巻を書写している。松沢村に戻った安政二年以降、定雄は三沢明と筆紙を介して交際を深め、幽界への関心を一層強めていく。本章では、紀州から戻った安政二年以降の定雄について、幽界への関心の中身に注目して検討する。

まず、『神界物語』受容の特徴を考える。紀州から戻った定雄は、三沢明に第三巻以降の送付を依頼している。

【史料四】

下総国宮負定雄主ゟ書状ヲ以申添候ニは、神界物語ハ、誠以皇国開闢以来之珍書ニて、大道教諭ノ要書ニ御座候、

右拝読以来、大道益開ケ、幽顕の道理明白ニ相成、実ニ古学安心の世ニ相成候、誠ニ尊君の大功績申迄も無之、御高徳感心の至、大道教官ニ相違無之、私同志同門中一統力を得、大慶御座候、大壑先聖(平田篤胤)入幽より以来の教導の人物は、尊君ニ限り可申と、人々御噂申居候、仮令外ゟ何様申候とも、神界物語は不残私方へハ御伝被下候様、伏而奉希上候、若哉他見を禁候ハヽ、私限ニて秘シ可申候

【史料四】は、『神界物語』第二十巻に収録された、安政二年のものと推定される三沢明宛書簡に関する記述である。宮負克己家に現存する第三巻以降の『神界物語』は、この依頼を受けて三沢明が送ったものと考えられる。第一章で述べたように、安政年間の気吹舎では『神界物語』との接点が極めて限られていた。傍線部の表現から、定雄がその状況を認識した上で、『神界物語』を三沢明から直接得ようとしていることがわかる。それでは、定雄はなぜ『神界物語』を求めたのだろうか。安政二年五月成稿の『幽界通話　下巻』には、第三巻以降の『神界物語』を読んだ感想が記されている。

【史料五】

抑、神界物語十九巻書集めたるは、実に参沢氏の大功なり、開闢以来の珍書にして、此書を読む人は幽現両界の道理明白にして、天地間に疑ふ事、知れざる事はなく、物識人とも称せらるべし、大道を学ぶ者必よむべき国学の宝書なり、偖、高山寅吉が幽界に往来して、杉山山人神に仕はれたるは、幽冥より、我先師平田大人の学事を助けんが為にして、仙境異聞の書始めて成り、幽現の理明かになりぬ、島田幸安が仙界に往来して、清浄利仙大神に仕はれたるは、幽界より、参沢明大人の学業を開かしめんが為にして、神界物語の書十九冊成りて、幽現の道理ます〳〵明かになり、国学の大道弥々開け、世に弘まれる気運のめぐり来るなり、平田大人・参沢大人の御

蔭に依て、仙境異聞・神界物語の両書を読み、己定雄も国学大道の奥儀を究めたる心地ぞする

【史料四】でいう「大道」が、「国学の大道」を指していることがわかる。定雄は、『仙境異聞』で論じられていた「幽現の道理」に関する理解を、当時成立していた『神界物語』全十九巻分(第二十巻は安政三年成立)を読むことで深めることができ、「国学大道の道理を究めたる心地」を得たというのである。

この理解を共有した人物が、宇井包教(かねのり)である。[31] 松沢村の鎮守・熊野社の神主である包教は、文政年間から天保初年にかけて定雄とともに松沢村の気吹舎門人のなかで中心的な役割を果たしたものの、天保四(一八三三)年に大原幽学に入門し、一時期平田国学から距離を置いていた。しかし、安政二年と推定される三沢明宛の書簡で、『神界物語』について、三沢明の「御篤学之御誠功」が顕れており、同書によって「古道学相学ヒ申者も安心ニ而、聢と一心決定仕候而、神徳教導、陰徳之勉、身分相応の行ひ仕候義、漸々得心」したと述べ、その理由として「平田先聖の現幽の義を御諭シ被置候上、貴君(三沢明)の依御精心候事」をあげている。包教は安政三年、定雄の仲介で平田鋏胤に、大原幽学の説く「性理学」に泥んだことについての詫状を提出している。時系列を考えると、包教が平田国学に復帰する上で、定雄を介した『神界物語』の受容が重要な契機となったことがわかる。また、包教が「神徳教導」以下の内容を実践する上での「安心」を得た理由として、平田篤胤の説く「現幽の理」を、『神界物語』や三沢明の「精心」によって内面化したことをあげている点から、定雄と包教の理解が近似していることも指摘できる。

次に、三沢明との交際が定雄に与えた影響を検討する。前章で述べたように、弘化年間以降における定雄の行動の特徴に、諸国の奇談・説話をまとめた著述の執筆がある。なかでも安政三年成立の『奇談雑史』は、民俗学においても注目されてきた代表的な書物である。同書は伊能穎則による『野夫拾彙物語』の序文を、書名部分を変えて転用し

ているように、『野夫拾彙物語』と通底する意識から執筆されているが、大きな違いが三沢明に由来する内容の有無である。定雄が安政二年以降に著した著述には、こうした三沢明から提供された話題が散見する。

宮負克己家には、三沢明による筆紙をまとめた綴りが現存する。この綴りには、「此三枚ハ小子カ控書ナリ、今般御撰ノ地震用心考ヘ御書入ニナリ候様奉希候」と記された丁があり、そこから前三丁分に記された大坂や鞠子宿での安政東海地震の被害に関する話は、安政三年七月段階の稿本『地震用心録』および、安政四年六月の自序が付された『地震用心考』に収録されている。後者には、安政三年付の三沢明による跋文および安政三年十二月付の紀州藩士・畔田翠山による序文が付されており、三沢明が一読していることがわかる。また、この綴りに収録された「陸奥国稲荷の霊狐諸人ニ乗移る事」という話は、「奥山正胤主より申添候実記」と記されている。奥山正胤は島田幸安が示した「敬仙の人々」にも名前があがっていた、幽界に強い関心を抱いた地方門人である。定雄は三沢明との交際を通じて、三沢明が持つ、他の気吹舎門人たちが発信した情報も得ることができたのである。

三沢明との交際による影響として次に指摘したい点は、農書や教訓書に位置づけられる著述への影響である。前章でみたように、定雄は清浄利仙君に対して農業に関する質問も用意していた。安政二年成立の『農事窮理考』「撰種」の項では、問答体の形式で、駿州富士郡本市場の米宮大明神や下総銚子飯沼観音にある一寸八分の米のように、神社の宝物となっている稲種が今の世の稲種と別種かという質問が記されている。【史料六】は、その質問への回答である。

【史料六】

近年嘉永四年の頃、紀州若山西瓦町といふ所の黒江屋某か子、神仙に誘ハれて九州日向国赤山といふ山の仙境に連往かれ、尊き神仙に仕ハれて四年の間紀州若山に数度往来せし童子ありて、其童子か神の世界の稲の図を写したるを持来りたる、其写を己も紀州若山に往きて見たるに、其形ハ木賊の形にして節々より二粒宛稲種子生りて

粒数ハ甚少き図也、神代の稲ハ其形なりしを、其稲種子を天津日の御国より天孫降臨の時に日向国に持降り給ひしか、其形変生して今の稲の形と化り、米粒小くなりて実生りハ多く生りたる物也と、彼紀州若山の神に仕ハれたる童子が神の世界にて聞たる説を書集めたる神界物語といふ書に正しく見へたり、されとも其稲種子今も天仙界には有りて、地仙界にハ絶て無しとそ、況人間世界にハ無し、偶神社の宝物に納まり有るは神代の遺物なるへく、故に何年を経ても朽る事なく今に有るなるへし、かゝる大粒の米ハ一粒食しても永く飢さるなるへし

安政元年に紀州を訪れた際に幸安が写したという「神の世界の稲の図」を見たこと、神代の稲種が今の稲の形になった経緯を『神界物語』から知ったことが記されている。嘉永五年時点でほぼ草稿を完成させていた『農事窮理考』に、三沢明を通じて得た情報が付加されているのである。先述したように、『農事窮理考』には天地開闢の成形に関する記述もあるため、篤胤の著書『天柱五嶽考』の引用など、玄学に関する知識も援用されている。『農事窮理考』「撰種」は、文政十一(一八二八)年に気吹舎から出版された『草木撰種録』における草木雌雄説を下敷きとしているが、定雄の草木雌雄説を理解する上で参考となる史料が、文政末年頃に著されたと考えられる「牝牡考　草稿上」である。同書は、篤胤の古史理解をもとに「人体は更にもいはず、草木鳥獣に至るまで、牝牡に左右の差別ある事」を論じ、国・山・川・風・火・油・水・金・土・石それぞれの雌雄に言及するというもので、定雄の父・定賢(やすまさ)の言や、篤胤の著書『霊能真柱』の内容が引用されている。定雄は農業研究の過程で、万物の生成との関連も追究していたのである。弘化年間以降における「米穀倍取の術」の模索が、その方向性を引き継いでいたからこそ、定雄は幽界に関する知識や情報を、「農師」意識と矛盾せずに受容できたのである。

（二）「幽現の理」

宮負定雄を取り上げた先行研究において、最も注目されてきた著述が『民家要術』である。同書は、文政末年に定雄が中心となって行った村政改革において、講での読み聞かせに用いられた書物で、天保初年には気吹舎で校訂も行われていた。[32]『民家要術』は出版に至らなかったが、定雄は安政年間に再び同書の執筆を企図しており、その過程で作成された控書が現存する。[33]

控書のなかの「神事第一」と小見出しが立てられた箇所では、「皇国は神国なり、人民は神の末孫なり、故に神祇敬信は人間の大道なり、忠孝之に次く、仁義礼譲又之に次く」と記されており、名主在任時の『民家要術』と異なり忠孝・仁義礼譲が後景に退き、「人間の大道」として「神祇敬信」が上位に置かれている。また、控書には『神界物語』に由来する内容も加わっている。

【史料七】

高位富貴の人といへども、悪行不徳の人の霊は奇獣虫けらにもせらるゝなり、官位と富貴は唯此世の物にて、幽界に入りては貴人高位の人も一旦位をはなれて、土民町人も一統にて、現世の功徳に因て幽界の官位定まるなり

これは、『神界物語』第一巻における幽界での官位に関する説明を受けた理解である。かつて居村で読み聞かせの素材として用いた『民家要術』の改訂版に収録しようとしていたことは、定雄がこの内容を他者に伝えようとしていたことを意味する。安政二（一八五五）年以降、定雄は三沢明から送られた書物の写本を作成し、地域の気吹舎門人などに与えている。その一人、分家した実弟・宮負茂兵衛利之に与えた『神仙感応経』の写本は、定雄によって漢文が読

み下し文に改められ、跋文も付されている。[34] その跋文には、「人の教誡には、此書にすぎたる善き物なく、中々に儒門の書籍の及ぶ所に非ず」という理由から、「世に弘めて、諸人によましむる」ために写本を作成した旨が記されており、「国学の大道」を「教諭」するという、『神界物語』によって喚起された意識に基づく写本作成と位置づけられる。

定雄は『神界物語』のなかでも、同書で説かれる「幽現の理」から大きな影響を受けていた。そこで次に、『神界物語』における幽冥観・霊魂観について、定雄が作成した抜書から検討する。『神界物語』に代表される三沢明の幽冥観について岸野俊彦氏は、家の永続・繁栄を強く希求しつつも、それを実現するための手段の脆弱さと表裏する形で、死後も生き続ける魂の来世での富貴を願うことを本意とする、「再生」思想と結びつくものであったと指摘した。[35] しかし先行研究では、定雄の理解に基づいた『神界物語』受容の検討は行われていない。

金杉貞俊の生家には、定雄が安政三年六月に作成した『神界物語　抜書　幽境談』、翌安政四年正月に作成した『神界物語　抜書　下』という二冊の抜書が現存する。両書の冒頭には、貞俊が記した目録が収録されており、貞俊が両書を読んでいることがわかる。『幽境談』の奥書で定雄は、「此一巻金杉氏依懇望令進写者也」と記している。この文言をそのまま鵜呑みにはできないが、嘉永七(一八五四)年時点で『野夫拾彙物語　六』に島田幸安に関する記事などを収録していたように、貞俊が『神界物語』に対して関心を抱いていたことは確かだろう。次に掲げるのは、『幽境談』に付された定雄による識語である。

【史料八】

此書は紀州若山の人島田幸安が神仙に誘はれ、九州の赤山といふ神界に通ひて、尊き神仙の御諭しを承りたる趣を、寺沢宗哲といふ人弐拾巻に書集めて神界物語と号く、其書の中より抜書せし物なれば、神仙の御教にして甚

も尊き書なり、幽理に暗く不信にして誹謗する輩は神罰を蒙るべし、故に猥りに他見をゆるすべからず、信仰の人々にハ慎て読聞かすべき書なり、あなかしこ

【史料八】同様に、下巻に付された跋文にも、「本書の中に他見をゆるすべからず、信仰の人々にハ慎で読聞すべき書なり、あなかしこと有」と記されている。第一章で言及した『神界物語』の性格を継承し、定雄は抜書に『神界物語』が「信仰の人々」に限定されるべき内容の書物であることを明記している。貞俊は嘉永七年十月時点で、神薬の存在を疑問視していたが、定雄が貞俊を「信仰の人々」、もしくは「信仰の人々」になりうる存在としてとらえていたことがわかる。また、この二冊が『神界物語』二十巻分の抜書という点は重要である。度々言及しているように、安政年間において『神界物語』と接することは、気吹舎門人であっても極めて困難であり、二十巻本は定雄の生家にしか現存が知られていない。定雄と縁戚関係にあるとはいえ、気吹舎門人以外の人物が、『神界物語』二十巻本の内容と接している点は、地域社会における平田国学の展開を考える上で興味深い。

次に、抜書の内容を検討する。二冊ともに原本を忠実に書写することを企図したというよりは、複数箇所の内容をまとめるなど、「抜書」というに相応しい性格の書物である。表3には、貞俊の作成した目録の項目を並べた。一見してわかるのは、様々な人物の幽界での様子が多く収録されている点である。『仙境異聞』と比較すると、こうした話題の多さは『神界物語』自体の特徴といえる。

宮負定雄と宇井包教は、『神界物語』が平田篤胤の説く「幽現の道理」を詳細に明らかにしたことで、古学・古道学を学ぶ者が「安心」を得られるようになったと述べていた。この点を踏まえて抜書を検討すると、著名な古人の幽界での様子に加え、修学や信心のあり方と霊魂の行方に関する普遍的な説明を記している点が注目される。次に、そ

表3-1 『神界物語　幽境談』の構成

丁　数	金杉貞俊による目録題
1丁オ～ウ	序文(弓道人〈宮負定雄のこと〉による識語)
2丁オ～ 14丁ウ	仙堺え往来／幽界の次第／天の岩戸御籠／幽界昼夜／虫類無／殺生を忌／海川の魚自由／スハ(諏訪)明神へ奉獣／神の世界明／神の供物／神を拝す／幽界闇二物ヲ見／甲子大国神／庚申少彦／人死霊と成／人死而馬鹿賢ナル／人富貴現世限／高徳人ハ位進／神ハ人仕業見通／現世人殺／幽界数々在／鬼仙／愚賓ノ長／高野山／(島田)幸安が友八人／幽年号不洩／幽文字不読／金銭の事／幽メヲ(女夫)無同居／雨雪身モ不触／幽の食物／幸安重行(常陸坊海存重行)ニ逢／八天狗ノ訳／幽の衣服／諸神ヲ崇敬／邪見霊妖魔成／シヤウキ(鍾馗)大神／火葬ハ不仁／絵書虚実／神社ノ額／神霊木像
14丁ウ～ 35丁オ 目録で「古人幽の有状」とされている部分	道綱ノ母／ナスノ(那須)与市／猪股小平六／山本勘助／楠庄五郎／松下禅尼／上杉謙信／朝比奈三郎／熊谷直実／難波契沖／心学ノ元祖／役小角／加藤清正／楠正成／清盛公／▲楠家書訳／シンラン(親鸞)上人／稲生平太郎／▲弘法ノキズイ／伴周五郎／蒲生君平／佐倉惣五郎／源義経／源頼朝公／北条義時／足利高氏／東照宮／道真公／老子君／孔子君／孔明／カンクハヒ(顔回)／曾子／子路／孟子／弓削道鏡／源頼光／柿本人丸(人麻呂)／渡辺綱／鬼同丸／酒仙童子／明智光秀／(塚原)卜伝／大坪道全／新井君美／光格天皇／仁光天皇／小野道風／僧雪舟／狩野法眼／平将門／中将姫／一休禅師／利休／林道春／太宰純／天満宮／ヲタ(織田)信長公／太閤秀頼／阿倍仲丸(仲麻呂)／松浦佐与姫／クマ坂長ハン(熊坂長範)／石川五右衛門／山サキアンサイ(山崎闇斎)／塙検校(塙保己一)／武烈天皇／舎人シン皇(親王)／板櫃社(藤原広継)／天竺ノシヤカ(釈迦)法師／巴提使／行基ボサツ(菩薩)／和気ノ清麿(和気清麻呂)／仲村元勝／伝教大師／元三大師／崇神天皇／日本武命／安徳天皇／大伴家持／淡路廃帝／吉田兼好／漢高祖ガ妻／玄宗皇帝妻／晋王右軍／カンタイシ(韓退之)／デンエン女(伝奕)／ホウカンゼン師(豊干禅師)／カンザン(寒山)／チツトク(拾得)／梁ノ武帝／蜀ノリウビ(劉備)／ヒハ法師(琵琶法師の祀る主空神)／ソガノ(蘇我)入鹿／ニツタ(新田)義興／ニツタ(新田)忠常／本間孫四郎／ニナ(蜷)川新右衛門／長威入道／伊藤仁斎／市川團十郎／野見宿祢／鎌足公(中臣鎌足)／武内宿祢／尊圓シン王(親王)／源三位ヨリマサ(頼政)／カノウウネメタンユウ(狩野采女探幽)／田丸／竹中半兵衛／竹本義太夫／ソロリ(曽呂利)新左衛門／絵師(須藤)久甫／(殿村)安守／絵師塩治(宦道)／松平越中守(定信)／紫式部／ノドノ守ノリツネ(能登守教常)／山鹿甚左衛門(山鹿素行)／山中鹿の助(鹿之助)／細井広沢／鳥石葛辰／顕如上人／紀伊ノ国祖(徳川頼宣)／大眞院(重倫)／中山甲斐守／信長将軍(織田信長の時に、天主教を伝えた南蛮人・ウルガン、フルガンや、南蛮寺の采紋・強須孟など)／島田幸安／サヌキ象頭山(象頭山の大神)／高山寅吉／▲平田先生(平田篤胤)ノ相／本居先生(本居宣長)／真渕先生(賀茂真淵)／荷田春満／久米仙人／大平国大神(平田篤胤)／清浄利仙大神
35丁オ～ 46丁ウ	宗哲(三沢明)前生／ジジキノ命寿(迩迩岐命の幽界での年齢)／ホホ出見命(火火出見命の幽界での年齢)／ウカフキ不命ノ寿(鵜茅葺不命の幽界での年齢)／美男美女ノ訳／スガ目トリ目辺目／片輪者／角力取／神鹿肩骨抜／仙界数万里見／大塩平八郎／耳無き生類／人魂有処／人間ノゲイノウ(芸能)／唐土神仙伝／小児死大人／盗人ノ罪／神信心ノ盗人／災難ヲのかるゝ(逃るゝ)伝／寿命長短／金比羅ノ使物／幽ニてハ切端痛／グヒン(愚賓)悪人ヲ殺／仙界官服／幽界位／幽界尊む術／宗哲(三沢明)問文武／露渕(紀州人、石野露渕)が前生／保吉(紀州人、本多保吉)前生／おミね(保吉妻)が前生／茨木英次郎(紀州人、茨木村親)／日蓮上人出所／一向宗ノ訳／日本人数／神々救人訳
46丁ウ～ 47丁オ	大尾(宮負定雄・金杉貞俊による奥書)

表3-2 『神界物語　抜書下』の構成

丁　数	金杉貞俊による目録題
1丁オ～ 3丁オ 古人の幽界での様子	西行法師／古事記撰者／俳諧人芭蕉／稗田阿礼／狂歌蜀山人／万霊親王／刀鍛冶天国／谷風／三條ノ小カチ宗近／相州正宗／在原業平／佐々木高綱／清原氏ノ娘／妻鹿孫三郎／佐々木岸柳／宮本武蔵／紀一法眼娘／左大臣時平公／高山寅吉／大石良雄四十七人
3丁オ～ 47丁ウ	日蓮上人／シンラン上人／癩病神ノ咎／京都大仏／太閤秀吉公／婦人無宿嫁ス咎／借金の事／愚賓の寿／丹後天の橋立／宗哲が父／上州生田万／宗哲が母／宗哲が妻／同人子供四人／神代釣針の事／浦島が事／英寿より伺幽／仙家水火ノ苦／火ヲ大切ニす／伊豆ノ三尊／備後ノ石橋／淡路ノ絵島／天照幽現照玉(照らし給ふ)／夫婦交接／周防国我慢次郎／神木ニテ家作ノ事／明より伺海幽山／人智愚ノ弁／蛮夷軍船ノ評／尊圓親王ノ書／凡人魂少き説／幽界十二月ノ名／同守袋ノ寸法／アメリカ国ノ伺／若山源六富札買／明より幽界ノ人ヲ伺／平田実子ノ伺幽／流行病ノ咒禁／物救ノ時唱咒文／子供木上見老翁／荒五郎不法／肥前小島八剣明神／遠州秋葉ノグヒン／石炭堀穴ニ久居／小田原参詣幸次郎／阿波国無名ノ小宮／釈迦空海ノツカヒ物／仙人ノ賀ノ説

金杉佐久治家文書より作成。
※(　)内は筆者による補足。
※▲をつけた3項目は幽界での様子を直接述べていない。下線を付した項目は幽界での様子に関する内容。
※目録と本文の順序が多少入れ替わっている場合がある。また、1項目で複数名の幽界での様子が記されている場合もある。

のいくつかを引用する。

【史料九】（原史料のルビは省略した）

一平田大壑先聖ハ、面相杉山山人の御相に能く似たるは深き縁ある事なり、平田先聖ハ大和国三輪大神大物主命天下の蒼生の為に霊を化現して平田大角と申幽現の聖者と生れ給へるなりとぞ、平田先生ハ天保十四年癸卯のとし九月十日御齢六十七歳にて羽州秋田にて終らせ給ひ、幽界に入られ給ひぬ、先聖へ出雲大社より大国主大神勅許有て、大平国大神篤胤命となり給ひし年月を幽界江伺ひたるに、即天保十四年卯の閏九月中旬と御諭しあり、今伊勢の山室山の幽界に坐まし…

一荷田春満、服部中庸二方も海幽山に在りて大平国大神に奉仕せらるゝなり、凡て平田先生の学風篤志の門人達、死して霊となりたるは、皆、海幽山の神界に止まるなり

一親鸞上人ハ出家の戒律を卒、妻帯肉食の身にて、居ながら財宝を聚め情慾を恣にし、栄花を極めん為に法然が往生安楽国の易行の方便を後捕にして新宗を企て、俗言の文章を作り、諸神仙霊達を蔑如し、無智の男女児童より他宗の輩までも己が邪法に引入れたる大罪にて、妖魔の境に入り、今は虫螻となりて非類の苦悩を受るなり、斯る邪慾無道の宗旨にて凡俗の情に叶ふに因て寺院の繁昌する事なれども、栄ふるは妖魔の業なる故、此宗門皇国に滅亡するに違ひなしとぞ

一親鸞日蓮共に始のほとは釈魔になりたれとも、親鸞は虫螻となり、日蓮ハ野狐となりたる、日蓮の方罪軽し、凡一向宗の石凝霊は虫螻となり、法華宗の偏信者は皆獣類になる定めなり

『仙境異聞』のなかで寅吉が説く幽界のあり様も、排仏崇神の立場に立脚していると指摘されている。[36] 具体的には、

空海に関して、寅吉が篤胤の質問に対して「ただ天狗に成りたりと云ふことは聞きたり」と答えている箇所などがこれに該当する。しかし、親鸞や日蓮の幽界での詳細な様子、さらには一般の信者についての記述は同書に明記されていない。『神界物語』が「門人」や「信者」のように、民衆までを対象に霊魂の行方を論じたことは、定雄や包教が「国学大道」や「神徳」の教諭・教導を行う上での「安心」獲得に寄与したのではないだろうか。この点の実証は不十分だが、少なくとも定雄が「幽現の理」を理解する上で大きな影響を受けたという『仙境異聞』と『神界物語』の内容を踏まえると、「民家要術　控書」における悪行不徳の人の霊が「虫けら」になるという理解が、『神界物語』を受けたものであることは確実である。

『神界物語』の抜書に、「信仰の人々」にのみ読み聞かせるべきとの文言を記したように、定雄が無限定で三沢明から得た知識や情報を流布させた様子は窺えない。しかし、嘉永五年時点で自身の「教諭ニ随候人者稀々ニ見請候」として秘していた著述群が、「国学大道の奥儀を究めたる心地」を得た安政年間に完成していった点からは、嘉永七年に気吹舎を通じて『神界物語』の情報と接し、安政年間に三沢明との交際を深化させていったことが、宮負定雄の思想・行動に大きく影響したことを読み取れるのである。

おわりに

本稿では、嘉永・安政年間における宮負定雄の思想を、幽界への関心に着目して検討した。

岩長姫神信仰にみられるように、弘化年間には神仙界への関心を抱いていた定雄は、嘉永七(一八五四)年の春に気吹舎を通じて『神界物語』の話題と接し、それに強い関心を寄せた。富草に注目していたこともあり、特に幽界の「神

薬」については地域の人々に広く情報を伝え、神薬を希望する人々を「年齢姓名書」にまとめている。また、定雄は様々な疑問を神仙に尋ねようとしていた。本稿では、こうした行動がいずれも「人民助の為」といった意識に基づいていることから、松沢村への帰村の動機である「農師」意識の延長線上に、幽界への関心を位置づけるべきと主張した。

紀州で三沢明と面会して後の定雄は、三沢明との交際を深め、事例・理論の両面に渡る知識や情報を得た。とりわけ、『神界物語』の幽冥観・霊魂観から多大な影響を受け、平田国学の教説に基づく「大道教諭」の実践行為として、著述・写本の作成を活発化させた。世上との距離感を感じていた嘉永五年時と異なり、既に交流があった人物が中心とはいえ、安政二(一八五五)年以降に積極的な他者への働きかけがみられることは、『神界物語』の話題との接触・三沢明との交際深化が定雄にとって持った意味の大きさを示している。

先行研究では、三沢明の論から多大な影響を受けていく晩年の定雄について、「現世より来世に興味が移[37]った、「農政家から説話文学者への転身[38]」といった評価が与えられてきた。しかし、幽界に関する知識や情報の収集は「農師」意識と矛盾していない。その理由としては、定雄の農業研究が早くから、平田国学の古史理解や玄学に関する知識を参照するという方向に向かっていたことがあげられる。三沢明の論を『農事窮理考』に収録したことは、その証左といえるだろう。

最後に、地域民衆にとって、こうした定雄の幽界に関する知識・情報の受容が持った意味を考えたい。

安政四年九月、江戸の気吹舎から香取参詣に向かう途中の筑前の気吹舎門人・宮崎元胤が、定雄の許を訪れている[39]。定雄はこの時聞いた話を『疱瘡厄病除福草考』に収録しており、両者の間で富草に関する話題があがったことが確認できる。また、元胤は筑前に『農事窮理考』の写本を持ち帰っており、『疱瘡厄病除福草考』も宮崎家文書のな

かに現存する。幽界への関心を強める安政期の定雄を、元胤は好意的にとらえたと理解できる。

しかし、翌安政五年正月に、定雄の長子・源蔵は、定雄の「散財」による「難渋」と、定雄の妻・やすが前年秋に病に倒れ、「相続も相成兼」ていることを理由として、名主退役願を領主に提出している。やすの病は、元胤の来訪と時期が重なる。領主への願書にこうした文言が記されているように、第二章でみたような天保飢饉後の松沢村・宮負家の状況下では、定雄の行動に理解を示す人々は決して多くなかったのである。定雄が『神界物語』を「信仰の人々」にのみ伝えると位置づけていたことを踏まえると、定雄の行動を否定的にとらえた人々の多くは、詳しく同書の内容を知ることはなかっただろう。

ただし、安政年間における三沢明の著述との接点の限定性を考えると、宮負定雄が第三巻以降の『神界物語』のような書物や、三沢明の持つ知識・情報を得て、それらが地域で伝えられた事実は注目に値する。そうした伝播の例として本稿では、神薬に期待した人々、神薬の真偽を疑問視した金杉貞俊といった気吹舎門人以外における異なった反応のあり方を紹介した。また、【史料七】の前提となった現世と来世の貴賤の関連についての『神界物語』第一巻の記述に対しては、三河の気吹舎門人・竹尾正寛が、幽界でも「天皇命の大御霊の、凡人と同じかるべき理は、かつてあるまじき事」として、「いぶかしとも不審しくも」あることだと疑問を呈したことが指摘されている。[40] 宮負定雄が「国学大道の道理を究めたる心地」を得た『神界物語』に対する反応は、気吹舎門人のなかでも一様ではなかった。各地の人々は、幽界に関する知識・情報を、各々の直面する課題や関心に基づいて受容・理解した。だからこそ、こうした多様な反応がみられるのである。

安政五年九月に定雄が没した後も、『神界物語』および同書から影響を受けた定雄の著述は当地にのこり、気吹舎門人以外にも読まれている。地域の人々は、そうした内容をどう受け止めたのか。幕末以降の地域における平田国学

や民衆思想の展開を考える上で、幽界との向き合い方への着目は、有効な視角となるはずである。

註

(1)岸野俊彦「「草莽の国学」の再検討」(『歴史評論』三三八、一九七八年、のち岸野『幕藩制社会における国学』校倉書房、一九九八年に収録)。

(2)岸野俊彦「紀州藩平田派国学者三沢明の思想的特徴」(『名古屋自由学院短期大学研究紀要』一〇、一九七八年)および前掲註1。

(3)椙山林継「相馬地方における平田銕胤書簡―解題と翻刻―」(『國學院大學日本文化研究所紀要』八九、二〇〇二年)。

(4)芳賀登「幕末変革期における国学者の運動と論理」(『日本思想大系』五一、岩波書店、一九七一年)。

(5)拙稿「平田篤胤門人宮負定雄の教諭論」(『関東近世史研究』六一、二〇〇七年)。

(6)松沢村に拠点を戻した動機について、前掲註5拙稿では『野夫拾彙物語』(無窮會専門図書館平沼文庫所蔵)に収録された自叙伝を中心に論じたが、同史料の内容は後掲註17『農事窮理考』や、後掲註22「宮負定雄書状」から裏付けることができる。なお、詳しくは「宮負定雄の国学受容と「農師」意識」(第六六回民衆思想研究会報告、二〇〇七年)をもとにした別稿で論じる予定である。

(7)千葉県旭市宮負克己家文書。本稿で使用する史料は明記しない限り同文書である。なお、『神界物語』の内容については、岸野前掲註2、三ツ松誠「「幽界物語」の波紋」(第六二回神道宗教学会報告、二〇〇八年)参照。

(8)「気吹舎日記」嘉永二年閏四月二四日条に、「紀州寺沢立敬(三沢明)より書状到来、金子二歩入也、著書品々来」

とある。なお、本稿における「気吹舎日記」からの引用は、『国立歴史民俗博物館研究報告』一二二・一二八（二〇〇五・二〇〇六年）による。

(9)岸野俊彦「伊那平田学研究序説　一・二」（『伊那』六〇〇・六〇一、一九七八年）。引用された史料には「右之書等」とあり、『神界物語』以外の書物も対象になったと考えられる。

(10)前掲註3所収史料。

(11)『神界物語』第九巻。

(12)前掲註8「気吹舎日記」。

(13)近世後期の松沢村については、拙稿「東総地域における神職の学問受容」（『千葉史学』五三、二〇〇八年）参照。

(14)川名登「草莽の国学者・宮負定雄」（『商経論集』四、一九七三年）、同「草莽の国学者・宮負定雄小伝」（鈴木信雄・川名登・池田宏樹編著『過渡期の世界』日本経済評論社、一九九七年）。

(15)川名前掲註14。

(16)小野将「草莽の国学」（『千葉県の歴史　通史編近世2』千葉県、二〇〇九年）。

(17)九州大学記録資料館法制資料部門所蔵『農事窮理考』。

(18)『神界物語』第二十巻、岸野前掲註1。

(19)千葉県旭市宮負安茂家文書。本稿では、『宮負定雄未刻資料集』（宮負家蔵版、二〇〇〇年）の翻刻を、句読点を変更して使用した。

(20)石井加津間・三輪田綱丸宛「宮負定雄書状」（『旭市史　第二巻』旭市、一九七三年、八七六～八七八頁）。

(21)宮負克己家文書『疱瘡厄病除福草考』（『千葉県の歴史　資料編近世1（房総全域）』千葉県、二〇〇六年）。

(22)平山忠兵衛・正蔵宛「宮負定雄書状」(『旭市史　第二巻』、八七九～八八一頁)。『旭市史』では嘉永四年の書状と推定しているが、『農事窮理考』との内容比較から嘉永五年の書状と比定できる。

(23)『日本農書全集』三(農山漁村文化協会、一九七九年)所収。同書では、「礼儀ハ富足に起り」と『潜夫論』の文言を引用し、「国を富し家を富すハ礼儀の起る基なり。国を富す事農人の勤に有べし」と論じている。

(24)『天地開闢生植一理考』は、単体の書物としては安政四年に成立している(千葉県立中央図書館所蔵)。

(25)こうした鋏胤の関心は、子・延太郎(延胤)が「先陣之戦士ニ被申付」たことと関係がある(前掲註3所収史料および註7『神界物語』)。

(26)前掲註17『農事窮理考』。

(27)『仙境異聞』(『新修平田篤胤全集』第九巻、名著出版、一九七六年)。

(28)宮負克己家文書『神仙医方秘事』。同史料は、「大同類聚方」と「仙伝医薬秘書」を書写したもので、「清玉異人(島田幸安)口授　参澤明書記」とされている後者の末尾に六名の名前がある。宮負定雄が嘉永七年時点で薬方伝授を願っていることから、常長が伝授された時期は同年から安政年間の間だと考えられる。

(29)金杉貞俊の妻は、宮負定雄の父定賢の先代の娘・恵津である。以下、金杉貞俊に関する記述は断りのない限り千葉県旭市金杉佐久治家文書による。なお、貞俊の医療活動を紹介したものに、舟橋明宏氏による前掲註21『千葉県の歴史　資料編近世1(房総全域)』所収の資料解説がある。

(30)金杉佐久治家文書(前掲註21『千葉県の歴史　資料編近世1(房総全域)』所収)。

(31)以下の記述は、前掲註13拙稿「東総地域における神職の学問受容」による。

(32)拙稿「宮負定雄『民家要術』諸本の関係」(『書物・出版と社会変容』五、二〇〇八年)。

(33)宮負克己家文書「民家要術　控書」。
(34)宮負安茂家文書。
(35)岸野前掲註2。
(36)子安宣邦「仙境異聞」(『平田篤胤の世界』ぺりかん社、二〇〇一年、初出二〇〇〇年)。
(37)岸野前掲註1。
(38)太田素子「家と村の人間形成史」(中内敏夫・小野征夫編『人間形成論の視野』大月書店、二〇〇四年)。
(39)前掲註17『農事窮理考』および宮負克己家文書「霊夢記」。
(40)岸野俊彦「三河平田派国学者竹尾正靭・正寛・正胤覚書」(『名古屋自由学院短期大学研究紀要』一一、一九七九年)。

[付記]
本稿の作成にあたり、金杉佐久治家・宮負克己家・宮負安茂家の皆様、大原幽学記念館の皆様には大変御世話になりました。末筆ながら、御礼申し上げます。なお、本稿は國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所事業「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」(平成二十～二十二年度のうち平成二十二年度)の成果である。